

《論文》

大正時代の「デイモンとピシラス」—シャーロット・ヤングと鈴木三重吉の間

佐野 幹

1. はじめに

明治期に修身口授用の教科書として日本に流入した「メロスの伝説」は、大正期には、国語読本、副読本、童話雑誌や児童劇脚本等に掲載され、様々な受容を見せていた。本稿は、「メロスの伝説」の一つ、鈴木三重吉の「デイモンとピシラス」（「赤い鳥」1920年11月）を対象として、大正期における「メロスの伝説」のネットワークの一端を明らかにすることを目的としている。

初期の「赤い鳥」に掲載された「童話」は、海外の文学作品からの翻案、再話が多数を占めている。特に三重吉の作品は、「「ぼっぼのお手帳」を除けば、すべて再話か翻案であった。」といわれ¹、「デイモンとピシラス」も「創作」ではなく、「再話」である。従来の研究では、三重吉の「デイモンとピシラス」の内容を考察した論考や太宰治の「走れメロス」と比較した研究はあるものの²、典拠との比較を行った論考は見受けられない。そのため、「メロスの伝説」と三重吉の「デイモンとピシラス」との関係はいまだに明らかになっていない状況にある。

本稿では典拠を確定し、それとの比較を通して「デイモンとピシラス」の意義を明らかにしていきたい。童話時代の代表的なメディアとされる「赤い鳥」の作品をその典拠と比較できれば、童話というジャンルの性格を再考することにもつながるはずである。

2. 典拠について

以下では「デイモンとピシラス」の典拠の確定を行う。

三重吉は、自分が再話したテキストの典拠について言及することがあるが、幸運なことに「デイモンとピシラス」についても、三重吉自身が語ってくれている。この話は「赤い鳥」に掲載された

後に「赤い鳥の本」の『救護隊』（1921年11月）に採録されたのだが、その「序」の中で三重吉は次のように述べている。

第一話「救護隊」は、英吉利の女流記者シャーロット・ヤングが、探検家エドワード・ケインの手記によつて記述したものゝ再話である。

（略）以上、「水の命」以下、「ガートルード」までのお話も、「救護隊」と同じく、すべてヤングの記述によつてかいたのである³。

『救護隊』は全部で8話からなる「童話集」である。第一話が「救護隊」、第二話「命の水」、第三話「デイモンとピシラス」、第四話「コリシエアの闘技」、第五話「烈婦ガートルード」、第六話「獅子王」、第七話「老博士」、第八話「少年王」となっている。「序」によると、第一話の「救護隊」から「デイモンとピシラス」を含めた「烈婦ガートルード」までの5つの話が「シャーロット・ヤング」の話の再話だというのである。「シャーロット・ヤング」とはイギリスの作家シャーロット・ヤング（1823～1901）のことである。

先行研究においては既に横田順子が、第一話の「救護隊」とシャーロット・ヤングの *The Rescue Party* との照合を行っている⁴。横田がどの *The Rescue Party* を参照したのかは明らかではないが、おそらく *A Book of Golden Deeds of All Times and All Lands* (1864) と考えられ⁵、このテキストの中には *The Rescue Party* だけでなく *The Two Friends of Syracuse* と題して「デイモンとピシラス」と同じ話が存在している⁶。

そこで、*A Book of Golden Deeds* の中に『救護隊』に含まれた話が他にもあるか調べたところ、「命の水」、「コリシエアの闘技」、「烈婦ガートルード」と同じ話が *A Book of Golden Deeds* に含

まれていることが確認できた。つまり、図1のように『救護隊』に含まれていた5つの話は、*A Book of Golden Deeds* の話に全て対応していたことになる。

図1

鈴木三重吉『救護隊』	シャーロット・ヤング <i>A Book of Golden Deeds</i>
救護隊	THE RESCUE PARTY
命の水	THE CUP OF WATER
デモンとピシラス	THE TWO FRIENDS OF SYRACUSE
コリシエラムの闘技	THE LAST FIGHT IN THE COLISÆUM
烈婦ガートルード	FAITHFUL TILL DEATH

三重吉は再話用のテキストとして「同じ一冊の本に収録された複数の作品から話をとっている傾向」がある⁷。そのことから、おそらく今回も同様にまとめて *A Book of Golden Deeds* から話をとったと考えられる。他言語の翻訳書を参考にしたことも考えられなくはないが、英文学を専攻した三重吉ならば、英文学の本書を手にする可能性は高く、なおかつ他書に頼らず原書から容易に翻訳・再話できたと考えられる。

以上のことから、典拠をヤングの *A Book of Golden Deeds* と定め、論をすすめる。

3. シャーロット・ヤングとヤングの作風について

シャーロット・ヤングについて、先行研究で書かれている内容を以下にまとめておこう⁸。

シャーロット・ヤングは 1823 年、ハンプシャー州オターボーン村で生まれた。熱心な国教徒である父と日曜学校の責任者である母によって自制心、克己心、自己修練等の道德倫理を教え込まれて育った。数学、ラテン語を父から教わり、フランス語、スペイン語、イタリア語を教師から学ん

だが、教室で過ごす時間の多くは、両親が選んだ本を読むことに費やされた。このように手厚い家庭教育を受けたヤングは、驚くべきことに、7歳の頃には日曜学校の教壇に立ち、それ以後、生涯にわたって教師を務めたという。

作家としてのスタートは、J・キーブル (1792～1866) の指示があったとされている。ヤングはキーブルの多大な影響を受けたが、彼はオックスフォード運動の指導者であり、高教会派を思想面で支えた人物であった。オックスフォード運動とは、キーブルやニューマン等オックスフォード大学の神学者を指導者として、「司教の権威、伝統、歴史的勢力としての教皇に対する尊敬などを強調し、ミサ聖祭、告白の秘密、独身、断食などを強調し、国家の監督からの解放を要求した」運動である⁹。

ヤングはこのキーブルから、日曜学校の生徒向けの本を書くように勧められ、それをきっかけに小説を書き始めるようになる。ヤングが小説を書く目的は、世俗的な利益のためではなく、キーブルが指導したオックスフォード運動に貢献するためであり、文学を通じて読者にキリスト教の教義と運動の目的を理解させることにあった。

吉井紀子は、そんなヤングの生涯について「トラクタリアン〔高教会派の信徒：引用者注〕の精神を忠実に守り、高潔でかつ自己犠牲的な一生を送った」とまとめている¹⁰。

日本においてヤングに関する研究は決して多いわけではないが、英米児童文学史においては、児童文学黄金期に重要な作品を残した作家として名前を残している¹¹。『ひなぎくの首飾り』(*The Daisy Chain*) は『若草物語』(*Little Women*) に連なる家庭物語の原点に位置づけられ、1853年に出版された『レッドクリフの相続人』(*The Heir of Redclyffe*) は多くの読者や同時代の作家から絶大な支持を得た歴史物語として記録されている。ちなみにこの二つの作品ほど有名ではないが、*A Book of Golden Deeds* も、“the book of golden deeds” という 20 世紀初めに多く出現した、教訓的な児童文学のジャンルの端緒として位置づけら

れている¹²。

さらに、10代の少女を対象にした雑誌、「マンズリー・パケット」を1851年から1893年の長きにかけて編集し、イギリスの児童文学の発展に大きく貢献した。吉井はこの雑誌の功績を次の4つに要約している。

- ① 単行本より安く、幼児から大人まで気軽に読める雑誌という形態を、一般化した。
- ② 雑誌をメディアとして、特に国教徒の思想をひろめた。
- ③ 子どものための読み物への、一般の人々の関心を高めた。
- ④ 優秀な児童文学作家、例えばユーイング夫人等、の育成に貢献があった¹³。

興味深いことに、ヤングの功績は、「赤い鳥」を編集し、日本の児童文学に多大な影響を与えた鈴木三重吉の功績と重なる部分がある。三重吉は、「世界童話集」や「赤い鳥」を通じて、「純麗」で芸術性豊かな海外の読み物を子どもたちに紹介続けたわけだが、彼がヤングの本を選んだ背景には、二つの国の間に児童文学の近代化という子ども読み物をめぐる状況の一致があったと思われる。

さて、研究者がヤングの作品に見られるテーマの特徴として指摘するのは、キリスト教の教義である。たとえば初期の作品である1844年の『アビー・チャーチ』(Abbey Church)について、吉井は、

『アビー・チャーチ』は、主人公の少女が住む村の新しく完成した教会を中心に、少女が自制心 (self-control) と自負心 (self-conceit) との間を揺れ動きつつ、自己修練を積み重ねて立派な女性に成長する、という物語である。

この構想は恐らく実際にオターボーン村の教会が完成し、ヤング自身堅信礼をうけたことによる、キリスト教徒としての新たな決意と感動から生まれたものであろう¹⁴。

と述べている。また、『ひなぎく的首飾り』(The

Daisy Chain) について、川端有子は、「国教徒としての女性の生き方の理想を日常生活に沿って教える読み物として書かれている」と述べている¹⁵。

つまり、ヤングは極めて宗教色の濃い作家であり、子どもや少女を対象にキリスト教を理解させるための作品を世に送り出していたといえるだろう。次に説明するが、*A Book of Golden Deeds* もその例に漏れていない。

4. *A Book of Golden Deeds* の目的

A Book of Golden Deeds は、ヨーロッパと中東地域を中心に、世界各地の有名な逸話を、紀元前から現在(1864年)にかけて年代順に並べたエピソード集である。Preface には本書の目的が次のように記されている。

このエピソード集は、そのような「真新しさの：引用者注」ために書いたのではない。むしろ若い人たちのための宝典にすることを意図している。若い人たちが通常要約されている歴史よりもより詳しく知り、魂を揺さぶるような行為を知ること、歴史の中の出来事に生き生きとした輝きを与えられるように。また、普段の読書のようにただ読むだけではなく、それが英雄的行為や献身の精神を呼び起こし、読者自身が行動を起こすきっかけとなることを信じて、このエピソード集をまとめた。自分自身を忘れて他者に全てを捧げることを原点とし、出世することや、読みを得ること、成功することを目的とするのではなく、ただ純真な義務、慈悲の心、親愛の心から起こす行動を見て考えることは、間違いなく有益である。なぜなら「何も期待しないで」行動することは、最も称えるべき行為だからである¹⁶。

つまり、魂を揺さぶるような行為 (the soul-stirring deeds) のエピソードを提示することで、英雄的な行為や献身の精神 (heroism and self-devotion) を若い人たちに促すことを目的としたと言うのである。魂を揺さぶるような行為と

はどのような行為なのか。ヤングはそれを「黄金の行為 (Golden Deed)」であるとして、What is a Golden Deed? の章の中で説明している。具体的な事例を挙げて説明しているのだが、以下には端的に述べている箇所を引用する。

「黄金の行為」の地金は献身である。(中略) 他者のために自分を投げ出す精神、つまり、宗教、国、義務、同志、時には見ず知らずの人への哀れみのために、何事にも挑み、あらゆる危険を冒し、何事にも耐え、死に直面し、命をすり減らし、苦しみながら目的を貫くのが「黄金の行為」である¹⁷。

このように「黄金の行為」を、他者のために自己犠牲を厭わない献身としている。また、この行為に共通する本質的な特徴は、「不純な自己を捨て去ること」だと述べている¹⁸。さらに続けてヤングは、「黄金の行為」が、読者の日常生活で営まれることを願って、次のように言う。

若い読者たちに伝えたいことは、これらの様々な名誉ある出来事をあなた方が読むことで、あなた方の心に火が付き、彼らがしたような献身の行為に憧れて、日常の生活でも常にこのような行動を意識して心掛けるようになってもらいたいということである¹⁹。

このことから、本書のエピソード集は、「黄金の行為」を若い読者に内面化させ、教化することを目的に書かれたことがわかる。しかし「黄金の行為」を神の権威に基づいて説明していることから察せられるように、ヤングの究極的なねらいは、何よりも若い読者にキリスト教の教えを実践させることであつたに違いない。The Two Friends of Syracuse もそのねらいを達成させるための一つの逸話として位置づけられているのである。

それでは三重吉は The Two Friends of Syracuse をどのように再話したのだろうか。次に比較検討してみよう。

5. The Two Friends of Syracuse と「デイモンとピシラス」の比較考察

以下では、三重吉の「デイモンとピシラス」(以下「三重吉版」と呼ぶ)とヤングの The Two Friends of Syracuse (以下「The Two Friends of Syracuse」または「ヤング版」と呼ぶ)を比較考察することとする。なお、The Two Friends of Syracuse の底本として、

A Book of Golden Deeds of All Times and All Lands. 1864. Cambridge: Sever & Francis, 1865.

を用いた。また、参考資料として神奈川近代文学館の「鈴木三重吉赤い鳥文庫」に収蔵されている三重吉原稿も適宜用いた。登場人物の呼称については煩雑さを避けるため、三重吉版に合わせて、Damon を「デイモン」、Pythias を「ピシラス」、Dionysius を「ディオニシラス」と呼ぶこととする。

「デイモンとピシラス」はどれだけ原本と異なっているのだろうか。渡辺茂男は、三重吉の再話の態度について「三重吉自身も、あるときには原話を潤色拡大し、あるときには削除改作し、あるときには、逐語訳をするなど、そのときどきの原話に対する感覚から異なった態度をとっている。」と指摘している²⁰。この渡辺の区分に当てはめると「デイモンとピシラス」は、概ね「削除改作」の部類に入る。このため以下では、相違点や削除された箇所を中心に取り上げ、比較検討する。

段落・構成について

はじめに概観を得るためにも、段落・構成の相違を確認しよう。まずはヤング版からである。

図2のように、ヤング版は9つの段落に区切られている。段落ごとに見出しがあるわけではないが、9つの段落はそれぞれ次のような内容になっている。

- ①ピタゴラスの哲学と黄金の行為の説明
- ②ピタゴラス学派の教義とシチリアを支配するディオニシラスの説明

- ③変貌するディオニシアスとエピソード
- ④ディオニシアスのエピソード
- ⑤ディオニシアスの恐ろしさと死刑宣告されるピシアスについて
- ⑥ピシアスが猶予の交渉をし、デイモンが人質を申し出る場面
- ⑦行って帰ってこないピシアスにデイモンが動じない場面
- ⑧デイモンが友を信じ、ピシアスが帰ってくる場面
- ⑨ディオニシアスが刑を解き、仲間入りを求める場面とエピソードの説明

ある。

次に段落間の関係を見てみよう。The Two Friends of Syracuse は一種の額縁構造のようになっている。タイトルが示すように、話の本体は「デイモンとピシアスの話」の部分(⑤⑥⑦⑧⑨)と考えられるが、この部分は「ピタゴラス学派の説明」(①②)の部分によって価値づけられている、あるいは「ピタゴラス学派の説明」(①②)の部分の具体例となっているといえる。その意味で「ピタゴラス学派の説明」(①②)はテーマにからむ重要な部分である。

「ピタゴラス学派の説明」で語られている内容を確認する。①「ピタゴラスの哲学と黄金の行為の説明」では、キリスト教の立場から、ピタゴラス学派の価値づけが行われている。

ギリシャの中でもっとも高潔で優れている功績がピタゴラス哲学であるとし、宗教が異なっていたとしても、真の献身 (true self-devotion) である黄金の行為は、熱心で敬虔な信者と高尚な環境の中で行われる、と高く評価している。また、熱心で深い精神の追求を受け入れていたギリシャ人が、聖書にある「自分自身が律法である」ことを実行することで黄金の行為が成し遂げられた、とピタゴラス学派の功績とキリスト教とを関係づけている。

②では、「ピタゴラス学派の教義とシチリアを支配するディオニシアスについての説明」がなされている。ピタゴラス学派の教義内容については、次のように語られている。

彼らは、感情、特に怒りを抑えることやあらゆる苦しみにも忍耐力を持って我慢することを教え込まれた。これは自制によってもっと神に近づける、そして死は肉体というしがらみから自由になることであると信じられていたからである。また、彼らは、悪事を働く人の魂は下等動物のように墮落し、善行をする人の魂はより純粋になり、高潔な存在へと高まると考えていた。これは、少々不完全で間違った点があるにせよ、この考えは生活に規律をもたらし、英

図2 段落・構成図

ヤング版		三重吉版
学 派 の 説 明	①ピタゴラスの哲学と黄金の行為の説明	/
	②ピタゴラス学派の教義とシチリアを支配するディオニシアスの説明	
ソ ア デ イ ス の オ エ ニ シ ア ス の 話	③変貌するディオニシアスとエピソード	一 デイモンとピシアスの話
	④ディオニシアスのエピソード	
デ イ モ ン と ピ シ ア ス の 話	⑤ディオニシアスの恐ろしさと死刑宣告されるピシアスについて	二 デイモンとピシアスの話
	⑥ピシアスが猶予の交渉をし、デイモンが人質を申し出る場面	
	⑦帰ってこないピシアスにデイモンが動じない場面	
	⑧デイモンが友を信じ、ピシアスが帰ってくる場面	
	⑨ディオニシアスが刑を解き、仲間入りを求める場面とエピソードの説明	

この九つの段落を題材でまとめると大きく三つのまとまりになる。①②が「ピタゴラス学派の説明」であり、③④が「ディオニシアスのエピソード」、⑤⑥⑦⑧⑨が「デイモンとピシアスの話」である。

このように見てみると、The Two Friends of Syracuse は、「デイモンとピシアスの話」だけではなかったことが分かる。「ピタゴラス学派の説明」、「ディオニシアスのエピソード」、そして「デイモンとピシアスの話」から構成されていたので

知と美德を得るために努力するモチベーションとなっており、宗教と言っても過言ではない。このピタゴラス教団に属する2人の友人が、紀元前4世紀にシシリア島のシラクサに住んでいた²¹。

このように、ピタゴラス学派のメンバーは宗教的な規律に従って生活していたことが説明されている。デイモンとピシアスの友情行為は、ピタゴラス学派の宗教的な教義を背景にして生じたのである。

一応、「ディオニシアスのエピソード」(③④)と「デイモンとピシアスの話」(⑤⑥⑦⑧⑨)との関係にも触れておこう。どちらもディオニシアスにまつわるエピソードであるが、「問題」と「解決」のような関係となっている。「ディオニシアスのエピソード」(③④)は、いかにディオニシアスが、疑い深い人間であるかを表すために複数の出来事(具体例)が語られており、ディオニシアスが問題を抱えた人物であることが示されている。一方、「デイモンとピシアスの話」(⑤⑥⑦⑧⑨)では、最後には、ディオニシアスは友情と信頼を取り戻し、彼が抱えていた問題は解決するのである。

問題が解決できたのは、デイモンとピシアスの「黄金の行為」が存在したからに他ならない。つまり、このエピソードの配列は、結果的に「黄金の行為」に注意が向けられるように仕組まれているのである。

次に三重吉版である。三重吉版では段落構成を変えている。話を二つに分け、それぞれに番号を「一」と「二」と付けているのである。

「一」では、ディオニシアスの紹介と彼にまつわる複数のエピソードがある。「二」は、デイモンとピシアスの話となっている。「二」の冒頭には「併しディオニシアスについて伝えられてあるお話の中で、一ばん人を感動させるのは、怖らく^マニシアスとデイモンのお話でせう。」とあり²²、ヤング版同様に、複数ある出来事の中では最も力点が置かれたエピソードとして扱われている。

このように三重吉版では話を「一」と「二」の二つに分けているわけだが、そうするとヤング版に存在した「ピタゴラス学派の説明」(①②)はどこへ行ってしまったのだろうか。

実は、「ピタゴラス学派の教義とシチリアを支配するディオニシアスの説明」(②)については全てが省略されてしまったわけではなく、その一部は「二」の中に取り入れられており、「教義の説明」と、「シチリアについての説明」が、デイモンとピシアスの属性を説明する際に使われているのである。「教義の説明」部分については次のように訳している。

たゞこの派の学徒たちは、すべて感情を殺すといふこと、その中でもとりわけ怒りを押へること、そして、どんな苦しいことでも、じつとがまんするといふことを、人間の第一の務めだと考へてゐました。かういふ風に自分の感情や欲望を押へつけることを自制と言ひます。ピサゴラスの学徒は、人間はこの自制が少しでも出来れば出来るほど、それだけ神さまに近づくことが出来る、生がい完全な自制を以て突き通して来た人は、死んだ後には神さまになれる、その反対に、少しでも自分を押へつけることが出来ないで、いろ／＼の悪いことをしたものは、次の世には、獣や、又はそれ以下の動物に生まれて来るのだと信じてをりました。

それ等の学徒は、お互いに、いつも固く結び合つて、いろ／＼の学問を修めてゐました。特に数学と音楽とを一ばん大切なものとして研究しました²³。

ピタゴラス学派の教義を「自制」というキーワードを中心に説明している。「自制」の定義について「かういふ風に自分の感情や欲望を押さえつけることを自制と言ひます」と丁寧に説明しており、子ども読者に理解させようとする配慮がうかがえる。

大幅に削除されているのは「ピタゴラスの哲学と黄金の行為の説明」(①)の部分である。先述し

たように、この部分は、「黄金の行為」を遂行したピタゴラス学派をキリスト教の立場から価値づけている段落であり、この宗教的な意義について語られている箇所を三重吉版では大部分をカットしているのである。また、他の箇所でも「宗教」の言葉がカットされている。「ピタゴラス学派の教義とシチリアを支配するディオニシアスの説明」(②)の中にある、ピタゴラス学派の説明の部分は、原文(ヤング版)では、“but which linked them so as to form a sort of club, with common religious observances and pursuits of science, especially mathematics and music.”(傍線は引用者)となっているが²⁴、ここが三重吉版では「それ等の学徒は、お互いに、いつも固く結び合つて、いろ／＼の学問を修めてみました。特に数学と音楽とを一ばん大切なものとして研究しました」となっており、「宗教的慣習」については触れていないのだ。

要するに、三重吉版では再話に当たって、意図的に道徳的規範は残し、宗教に関する説明は省略していたことになる。確かに「神さま」は出てくるが、宗教に関する説明が省略されているため、ピタゴラス学派の宗教的な意義はよく理解できないかたちになっている。

ディオニシアスのエピソードについて

次にディオニシアスにまつわるエピソードについて、順序と表現に着目して検討してみよう。

ディオニシアスのエピソードの数は、デイモンとピシアスの話を除くと、ヤング版も三重吉版も6つで変更はない。ヤング版の順序は「ディオニシアスの耳の話、ダモクレスの剣の話、寝室に溝を掘り巡らした話、髭剃りの話、アンティフォンの真鍮の話、ディオニシアスの詩の話」となっている。これに対して三重吉版の順序は、「ディオニシアスの耳の話、寝室に溝を掘り巡らした話、髭剃りの話、アンティフォンの真鍮の話、ダモクレスの剣の話、ディオニシアスの詩の話」となっている。ヤング版では「ダモクレスの剣の話」は「ディオニシアスの耳の話」の次に置かれているが、

三重吉版では「アンティフォンの真鍮の話」の次に移動している。なぜか。

「ダモクレスの剣の話」はヤング版で“famous anecdote which has become a prover”と語られているように²⁵、世界的に有名な逸話である。そのため三重吉版ではエピソードのハイライトとして後半に置いた可能性がある。実際、他のエピソードに比べると多くの紙面を割いており、比較的読み応えのあるエピソードとなっている。読者の高揚感を意識して再構成したと捉えたい。

表現の相違点としては、三重吉版ではエピソードの前に、「或とき」「或日」「又或とき」「或とき」と時間を表す言葉が加えられている点が注目される。このことによって、それぞれのエピソードが過去に一度生じた出来事としてイメージされ、臨場感を持って読み進めることができるようになっている。

さらに、三重吉版では、全体的に情景や人物の行動をより具体化するための言葉が加えられている点にも特徴がある。例えば、「ディオニシアスの耳の話」を比べてみよう。ヤング版では、

It is of him that the story is told, that he had a chamber hollowed in the rock near his state prison, and constructed with galleries to conduct sounds like an ear, so that he might overhear the conversation of his captives ;²⁶

となっているのに対して、三重吉版では、

彼は牢屋の後ろにある、大きな岩の中を、人に分からないように、そつと下から掘り開けて、その中へ秘密の部屋をこしらへました。そしてそこへ、牢屋から罪人の話し声がつたはつて来るやうな仕かけをさせ、いつもそこへ這入つてじいつと罪人たちの言つてゐることを立ち聞きしてみました。(傍線は引用者)

となっている。「そつと」「じいつと」という副詞

が加わっている。このことでディオニシアスが、執拗に人を疑い、自分に歯向かうものがないかどうかにかんして神経をとがらしている様子がより鮮明に伝わってくる。また「大きな岩」「秘密の部屋」といった修飾語は性質を詳しく表し、イメージの細部を読者に具体化させる働きをしている。なお、神奈川近代文学館にある三重吉原稿を見ると、これらの言葉が挿入された跡が残されており、推敲した上での表現の追加であったと推察される。

デイモンとピシアスの話について

では、デイモンとピシアスの話を比較・検討してみよう。この話のストーリー展開は、ピシアスが死刑を言い渡されたところから始まる。次に、ピシアスがデイモンを身代わりにしてギリシャに戻る。最後には、ピシアスが帰還し、ディオニシアスが3人目の仲間に入ることを願い出る。このストーリーに関しては両者の間に大きな違いはない。また、3人の主要人物、場面設定、構造も基本的には変わらない。

しかし、語り方には幾分相違があり、物語内容にも違いが見られる。その結果、読み取れるメッセージにも違いが生じている。まず、目にとまるのは、ディオニシアスの言動の描写である。三重吉版の方がディオニシアスの形象が豊かになっているのである。明らかに追加・変更されている箇所を挙げてみよう。

①ディオニシアスはそれを聞いて、はっはと嘲笑ひました。²⁷

②そんなにしてくまく遠い海の向うへ逃げ出しておきながら、またわざ／＼殺されにかへる馬鹿があるものか。そんなふざけた手でこのおれが円められると思ふのかといふやうに、から／＼と ひました。²⁸ (脱字あり：引用者注)

③「はゝゝ、それはお前がからかわれたのだよ。そんなことでむぎ／＼命を捨てようといふ

お人よしがどこにみよう。」とディオニシアスは笑ひました。²⁹

④ディオニシアスは、それ見ろと笑ひました。そして、いよ／＼今日の何時までにかへらなければお前を殺すからさう思へと言ひわたししました。³⁰

①と②は、ギリシャに戻る猶予を懇願するピシアスに対する、ディオニシアスの反応である。ヤング版では、ここは“The tyrant laughed his request to scorn. Once safe out of Sicily, who would answer for his return?” (暴君はこの要求を笑い飛ばした。いったんシチリア島から無事に出て、誰が彼の帰還を保証できるというのか?) となっている³¹。“laughed his request to scorn”の部分を「はっは」として、直接ディオニシアスが発した笑いに変えていることが分かる。また、“who would answer for his return?”は、語り手とディオニシアスの声が重なっている箇所であり、ヤング版では語り手の判断を示しつつ、ディオニシアスの内面にも焦点を合わせているかのように語っている。しかし、三重吉版では、ここも直接ディオニシアスが発話したかたちになっている。そのうえ「そんなふざけた手でこのおれが円められると思ふのか」はヤング版には存在しない表現であり、追加されたものである。ちなみに三重吉原稿を見ると「そんなふざけた手でこの」「められると思ふのか」は挿入した跡が残されており、意図的に追加されたことが推察される。

③は、ピシアスが、自分を保証する人物がいることを伝えた後の、ディオニシアスの反応である。ここに対応する箇所はヤング版では、“and while Dionysius, the miserable man who trusted nobody, was ready to scoff at his simplicity” となっており³²、三重吉版は翻訳したというよりも、書き換えたと言ったほうがよいかたちになっている。ヤング版では、挿入句として、語り手の、ディオニシアスに対するマイナスの評価が表出しており (the miserable man who trusted nobody (誰も信

じられない哀れな男))、語り手が強く関与しているが、三重吉版では、語り手の主観を排して、ディオニシアスの直接的な発話となっている。

④は当日になってもピシアスが戻ってこなかった時のディオニシアスの言動である。彼がいかに言いそうな台詞であり、ディオニシアスの個性がよく表されている。

このように、三重吉版では、語り手が説明していくかたちを減らし、人物(特にディオニシアス)の直接的な発話を積極的に取り入れている。そのため、ヤング版よりも人物の主体性が強められ、個性が発揮されているように感じられる。

さらに「獄卒」という端役や「牢屋」「死刑場」という場所が設定されている点も注意したい。「獄卒」に台詞があるわけではないが、デイモンの「見張り」をしたり(「ディオニシアスは、獄卒に言ひつけて、たえずデイモンの容子を見張りをさせておきました。」)³³、処刑の準備も担当したりしている(「獄卒は死刑の道具をそろへて待つておりました。」)³⁴。またデイモンの話の聞き役も務めており(「これは来る途中で海が荒れでもしたのに相違ない。何、私が殺さればそれでいゝではないか。」とデイモンは獄卒に言ひました。)³⁵、この「獄卒」という聞き役が設置されたことによって、人物同士の直接的な対話の実現し、彼らの対話によってストーリーを動かすことが可能になっている。

また「牢屋」(「デイモンは代つて牢屋へ閉ぢ込められました。」)³⁶、「死刑場」(デイモンは容赦なく死刑場へ引き出されました。)³⁷という場所を示す表現が加えられたことで、どこで何が行われているか読者がイメージしやすくなっているといえる。

終わりの場面について

最後に、終わりの場面(ディオニシアスが刑を解き、仲間入りを求める場面)の相違点を検討しよう。

注目したいのは、ディオニシアスが、自らを3人目の友人とするように願い出た後の叙述である。三重吉版では次のようになっている。

彼は、これまで嘗て人を信ずることが出来なかつた、哀れな人間です。彼はしたいまゝの乱暴をしました。さうしておいて自分の命を少しでも長く盗むために、あらゆる人を疑りました。そしてそのために多くの人をどん／＼殺したり押しこめたりしました。ですから彼はピシアスとデイモンとの二人のこの信実と友愛を見ると、本当に何よりもうらやましくて堪りませんでした。³⁸

ヤング版にならって語り手が説明するかたちをとっており、この箇所語り手の評価を盛り込んでいる。また、ディオニシアスの内面も加えられている。それは「ですから彼はピシアスとデイモンとの二人のこの信実と友愛を見ると、本当に何よりもうらやましくて堪りませんでした。」という箇所である。「信実と友愛」をうらやんだ、とあり、「信実と友愛」の力がディオニシアスの変容を促したかのような叙述となっている。

一方ヤング版では、

Yet all the time he must have known it was a mockery that he should ever be such as they were to each other—he who had lost the very power of trusting, and constantly sacrificed others to secure his own life, whilst they counted not their lives dear to them in comparison with their truth to their word, and love to one another.³⁹

となっている。「彼らは自分たちの命よりも約束を誠実に守ることと互いへの愛を優先していた」とあるように、「信実と友愛」だけでなく、命の優先順位についても言及がある点がポイントである。確かに、ディオニシアスはデイモンとピシアスの「信実と友愛」を羨望したのかもしれない。しかしそれ以上に、二人の自己犠牲の精神に衝撃を受けた(more struck than ever)⁴⁰ことが強調された表現になっているといえよう。

先述したように、ヤング版ではデイモンとピシアスの話は、「ピタゴラス学派の説明」の部分によって意味づけられていた。デイモンとピシアスの行為は、キリスト教を基準とした「真の献身」(true self-devotion)である「黄金の行為」(Golden Deeds)の具体例として挙げられていたのであり、この話のテーマも「真の献身」に回収されるようになっていっているのである。

注意深く読めば、三重吉版も「自制」についてはしっかりと説明されており、二人の「信実と友愛」がピタゴラス学派の教義から生じていることが理解できる。しかし、「ピタゴラスの哲学と黄金の行為の説明」の部分が大幅にカットされているため、二人の自己犠牲的な行為から「信実」「友愛」「自制」といった道徳的な規範は読み取れても、宗教的な意味合いを読み取ることは難しくなっているといえるだろう。

以上、三重吉版では、時や場所を明示し、人物を豊かに描くことで、自立した物語世界を作り上げていた。確かにそれは「子ども向きの文章表現に、文字通りの「彫心鏤骨」の努力を払った」⁴¹成果であり、子ども読者が物語に入り込めるようにするためになされた改善であった。だがしかし、宗教的な説明を排したことによってヤング版のテキストに含まれた宗教的なメッセージは消去されてしまったといえる。

6. おわりに

Nelson は、“Transmitting Ethics through Book of Golden Deeds for Children”で、ヤングの *A Book of Golden Deeds* をはじめとする教訓的な“golden deeds”の本を紹介し、特徴をまとめている。この論考の中で Nelson は、“golden deeds”というジャンルには共通して自己犠牲 (self-sacrifice) を強調する点があるとして、次のように述べている。

そのような犠牲は、とりわけ身体に関わるものである。ヤングが表現したように、「自己を忘れることよりも尊いものはなにもない。それ

ゆえ、私たちは、高度な目的と照らして、自分の安全を忘れ、がむしゃらな状態になって、命や四肢を極限の危機にさらす物語を聞くと、心が動かされる。」しばしば、それらの犠牲は、単にその人自身を危険にするだけでなく、身体の損傷や死を経験させるようなやり方で示される。これは、利他主義を基本にした倫理的な階層を子どもの中に注入する大人の努力を映し出しているように見えるかもしれない。その階層の中では、身体的な喜びや心地よさは、愛国心や敬虔のような理想への結束の公共的な賞賛に比べて、相当に低い位地に置かれている。子どもの悪さに対する厳しい体罰がいよいよ認められなくなった時代において、“golden deeds”の本は、その代わりに子ども読者を立派な人間を証明するものとして、他人のために自発的に痛みを受け入れることをイメージするように促すのである。⁴²

「デイモンとピシアス」では、宗教的な行為としての「真の献身」というテーマは希釈されていたが、三重吉自身は *A Book of Golden Deeds* に含まれた「自己犠牲の精神」を高く評価してヤングの本を選んだようである。彼は「救護隊」の「序」の中で、第一話の「救護隊」の話を見ることで「われ／＼人類が、今の文化のすべての課程を得るまでには、いかなる方面においても、つねに多くの隠れたる人々によつて、さま／＼の大きな犠牲が払はれ来り、又は現在にも絶えず払はれつゝあることに、しみ／＼感謝を捧げなければならない。」⁴³と言い、「第二話の「命の水」と第三話「デイモンとピシアス」とには、自己を第二とした、人に対する博大な思ひやりと、本当の固い友愛との権威が仰がれ」⁴³と述べている。

山口美和は、「赤い鳥」の童話選評から三重吉が期待した「芸術性」の基準を、「①文語的な大げさな表現やとってつけたような教訓がなく、簡潔に事実が述べられていること、②現実感のある表現で、無理のない論理的展開が行われていること」の2点に集約し、三重吉は、「何らの注釈的、説

教的態度を取らずして」読者に感銘を与えることができる芸術作品としての児童文学の意味を再三説いている」と指摘している⁴。「デイモンとピシナス」は、概ねこの「芸術性」の基準に従って再話されていたと認めることができるが、注意しなくてはならないのは、「信実や友愛」のために自己の命を第二とする自己犠牲の話に芸術作品としての価値を見いだしていたことである。「赤い鳥」以外にも、「金の船」「童話」等、当時の芸術的児童文学と呼ばれるジャンルの雑誌を読むと、自己犠牲を促す話は所々で目に入ってくる。確かにそれらの話には「とってつけたような教訓」は書かれてないかもしれない。しかし、人物の行動を通じて読み手の感化をねらった教訓話であることには違いない。

芸術的「童話」の時代においても、他者のために自己を犠牲にする従順な子どもは依然として求められていたのであり、そのような理想の子ども像が、ヤングの教訓的なテキストを日本に流入させた一つの呼び水となったのだろう。

「デイモンとピシナス」以降も「メロスの伝説」は繰り返し語られていく。「メロスの伝説」は自分の命よりも理想を優先させる話である。その理想を「信実や友愛」ではなく、「愛国心」や「敬虔」に書き換えることは造作もなくできてしまう。

今後、この話はどのようなかたちで昭和期につながっていくのか。今後、調査・検討すべき課題としたい。

¹ 福田清人・山主敏子編『日本児童文芸史』三省堂、1983年6月、131頁。

² 五之治昌比呂は『『走れメロス』とディオニュシオス伝説』（『西洋古典論集』16巻、1999年8月）、39-59頁で、三重吉の「デイモンとピシナス」に書かれた7つの逸話について、文献を博捜し、詳細な照合を行っている。

³ 鈴木三重吉『『救護隊』』赤い鳥社、1921年11月、1-3頁。

⁴ 横田順子「三重吉童話と原作の比較研究における問題点-「揺り寝臺」を例として-」『白百合女子大学 児童文化研究センター報』20号、1996年3月、245-248頁。

⁵ ヤングの作品の多くはデジタル化されており、

インターネットで検索が可能である。

⁶ 奥村淳が「太宰治「走れメロス」について-日本における〈ダモン話〉の軌跡-」（『山形大学紀要（人文科学）』第18巻第4号、2017年2月）、39-72頁で、三重吉の「デイモンとピシナス」はヤングの“A Book of golden deeds”（1864）の“The Two friends of Syracuse”と一致する部分が多い」と述べていることも合わせて参考にしたい。

⁷ 前掲、横田「三重吉童話と原作の比較研究における問題点-「揺り寝臺」を例として-」、245-248頁。

⁸ 基した主な文献は、吉井紀子「シャーロット・メアリ・ヤング 児童文学と宗教教育のはざままで」ニュー・ファンタジーの会編『ひなぎく的首飾り』透土社、1992年4月、139-192頁。川端有子「シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』（1856）から始まる系譜」『平成24年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「イギリス児童文学の原点と展開：家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語」』2013年10月、15-31頁。Hayter, Alethea. *Charlotte Yonge*, Plymouth, 1996. である。

⁹ 『キリスト教百科事典』ヘルデル代理店・エンデルレ書店、1960年6月、274-275頁。

¹⁰ 吉井紀子「シャーロット・メアリ・ヤング 児童文学と宗教教育のはざままで」ニュー・ファンタジーの会編『ひなぎく的首飾り』透土社、1992年4月、139-192頁。

¹¹ 桂宥子・牟田おりえ編著『はじめて学ぶ英米児童文学史』ミネルヴァ書房、2004年1月、50-51頁。宮副紀子「家庭物語（Family Stories）」日本イギリス児童文学会編『英語圏諸国の児童文学 I-物語ジャンルと歴史-』ミネルヴァ書房、2011年3月、79-84頁。

¹² Nelson, Claudia. *Transmitting Ethics through Books of Golden Deeds for Children*. In: Claudia Mills (ed.), *Ethics and Children's Literature*, Farnham, 2014. pp. 15-28.

¹³ 前掲、吉井紀子「シャーロット・メアリ・ヤング 児童文学と宗教教育のはざままで」、159頁。

¹⁴ 同上、151頁。

¹⁵ 前掲、川端有子「シャーロット・ヤング『ひなぎく的首飾り』（1856）から始まる系譜」、15-31頁。

¹⁶ Yong, Charlotte M. *A Book of Golden Deeds of All Times and All Lands*, 1864. Cambridge: Sever & Francis, 1865. pp. 5-6.

¹⁷ *Ibid.*, p. 5.

¹⁸ *Ibid.*, p. 8.

-
- ¹⁹ *Ibid.* , pp. 8-9.
- ²⁰ 渡辺茂男「『赤い鳥』と外国児童文学-特に民話について」日本児童文学学会編著『赤い鳥研究』小峰書店、1965年4月、167頁。
- ²¹ Yong, Charlotte M., op. cit., p. 59.
- ²² 鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯」「赤い鳥」第5巻第5号、1920年11月、10頁。
- ²³ 同上、10頁。
- ²⁴ Yong, Charlotte M., op. cit., p. 59.
- ²⁵ *Ibid.* , p. 60.
- ²⁶ *Ibid.* , p. 60.
- ²⁷ 前掲、鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯」、11頁。
- ²⁸ 同上、11頁。
- ²⁹ 同上、14頁。
- ³⁰ 同上、15頁。
- ³¹ Yong, Charlotte M., op. cit., p. 61.
- ³² *Ibid.* , p. 61.
- ³³ 前掲、鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯」、14頁。
- ³⁴ 同上、15頁。
- ³⁵ 同上、14頁。
- ³⁶ 同上、14頁。
- ³⁷ 同上、15頁。
- ³⁸ 同上、15頁。
- ³⁹ Yong, Charlotte M., op. cit., p. 62.
- ⁴⁰ *Ibid.* , p. 61.
- ⁴¹ 滑川道夫「『赤い鳥』の児童文学史的位罫」日本児童文学学会編著『赤い鳥研究』小峰書店、1965年4月、32頁。
- ⁴² Nelson, Claudia., op. cit., p. 16.
- ⁴³ 鈴木三重吉『「救護隊」』赤い鳥社、1921年11月、1-3頁。
- ⁴⁴ 山口美和「児童文学作品のテーマと子ども観の変遷 - 『赤い鳥』における〈死〉の扱いを中心として - 」『児童文化研究所所報』30巻、2008年3月、99-115頁。

(宮城教育大学)